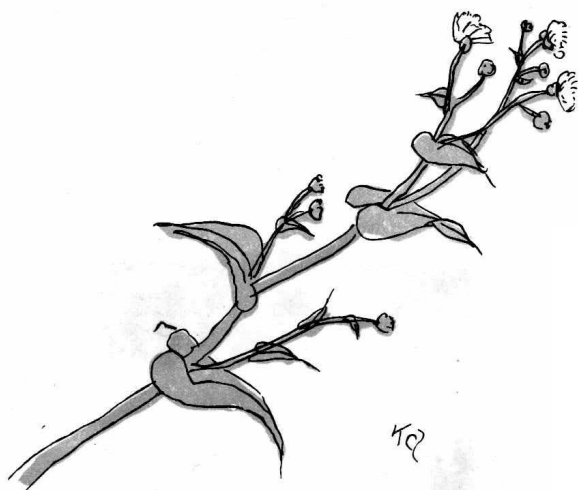


拝啓天皇陛下様

棟田 博



講談社版

拝啓天皇陛下様

著者との
話合により
検印廃止

◎ 棟田 博 一九六二

昭和三十七年十二月十日

第一刷発行

二八〇円

著者 棟田 博

装幀挿画 風間 完

発行者 野間 省一
東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 東洋印刷株式会社
東京都板橋区志村一ノ一

発行所 株式会社 講談社

振替 東京三九三〇
電話 東京 三一一一（大代表）

東京都文京区音羽町三ノ一九

（製本堅省堂）

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

拜啓天皇陛下様

「過去」は語らねばならない。「現代」は傾聴しなければならない。
さもないかぎり、「過去」も「現代」も落着けないであろう。

エーリヒ・ケストナー



1

この「赤紙」が、だしぬけに私を訪れたのは、昭和十二年七月十七日であった。

私は、時刻も記憶している。正午少し前だ。さらに、こんな、なんでもないことまで憶えている。そのとき、妻は目刺を焼いていた。

しかるに私は肝心なことを忘れてしまっている。赤紙を手にしたとき、この小さい一枚の紙片が、私の中に巻き起こしたであろう感慨がどのようなものであったかを、私はまるきり想い出せないのである。

唐突な衝撃というものは、むしろ、思い出を残さないのではなからうか。

赤紙というが、実際には薄紅色とろろのその紙片を手には、私は多分なにを考へるでもなく茫然としていただろう。そのとき、私が妻へかけた最初の言葉は、「おい、目刺、焦こげて

るじゃないか」だったそうである。

その十日前の七月七日の夜。北平（当時はそのようであつた）郊外の蘆溝橋附近で、支那駐屯軍（司令官田代統一郎）の小部隊と、中国第二十九軍（軍長宋哲元）の小部隊とが、ちょっとしたトラブルを惹起していた。

夜間演習中の日本軍部隊に対して中国軍が射撃を加え、これに応戦したという事件である。紛争は、しかし、どうやら「現地解決」がつきそうであつた。日本政府は「不拡大方針」を唱えていたし、げんに赤紙を受けた日の新聞には「将来の紛争防止に関する保障事項」の取決めは、双方の代表者間で諒解点に達したとあつた。

そんなとき、赤紙が来たのは、たしかに意外で、不意を衝かれたが、私はそれほど動揺はしなかつた。戦争にはなるまいと思われたからである。たとえ万一の場合にも、若い現役兵や予備役兵がいる。私の如き後備兵は、おそらく留守隊勤務であらう。明らかに私はタカをくくっていたといえる。さもなかったら、普通の事情でない妻の処置をそのままにして出征できる筈はなかつた。

ものの考え方に「赤がかつた」ところのある、しかも小

説家志望などという「無分別」を起して郷里を捨て、東京へ出奔している私に対して、親族会議は満場一致で准禁治産者の宣告を行っていたのである。妻にいたっては、単に准禁治産者と同棲しているところの「どこの馬の骨」とも知れぬ愚かな女にすぎないのであつた。

応召までに三日間しかなかつた。御本尊の私がタカをくくって気軽に発つて行こうとしている手前、妻としては齒がゆかつたけれども「悲壮がる」わけにゆかなかつたそうである。東京駅頭の別離に私たちが交した最後の言葉は、

「だいじょうぶネ」

「だいじょうぶサ」

であつた。

車窓を、夕立あがりの宵の、ネオン瞬きそめる東京の街がスイスイと後ろへ飛び去つた。これが東京の見納めになるのかという感傷など、そのときの私にはみじんも無かつた。

用をたしたら、また帰ってくる旅行者くらいのつもりである。その用を果たすのに浴血と流血の一年有半の歳月が費やされようとは、まったく、思つてもみながつたことではなかつた。

ある。

応召した岡山の歩兵第十聯隊の兵舎は超満員だった。私たちは練兵場周辺の民家に宿営したのである。

支給された被服は夏衣袴一組と帯剣だけであつた。一応、姿だけは兵隊になつたが、民家のタタミに起居する生活は家庭の延長の感を否めず、軍紀の弛緩は当然といえた。

ところで、局地解決がつくかにもえていた事件は、その後、郎坊事件、広安門事件と連鎖反応するに及んで、逆に「自衛上兵力行使を決意スルノ止ムナキニ至レリ」の支那駐屯軍の公式声明となつた。

炎天の町々に、あわただしい号外の鈴の音が鳴りひびく。もはや、これは戦争だった。

タカをくくっていたのは、単なる希望的観測にすぎなかつたのである。そうか、そう出て来たのか、と私は思った。それならそれのように考え直さなければなるまい。

私は、妻を呼び寄せようと決意した。あんな別れかたは、なんとしても不本意だ。現在となつては、どここの馬の骨かわからぬ女を「妻」として肉親に登録し、且つ確認させることは不可能であるが、だからこそ話して置くべき事柄があつた。

俸給を支給されたら直ちに送金しようと私は思った。因みに私の衣類を悉く入質せよと手紙を書こう。

私のその希望は、しかし、思いもうけぬ突発事のために打ち砕かれることになつた。

ところで、宿営地区の地方人たちは、私たちに対して、親切寛大にすぎたように思われる。一方、私たちは、まだ兵隊と地方人のあいの子であり、中途ハンプな人種だった。チャホヤされることに当初恐縮したが、忽ち、藪やかしに狎れてしまったのである。戦場に行くんだから何をしてもいいとは思わぬまでも、少々なら何かをやらかしても大目に見てもらえるという下心は誰にもあつた。事故が相次いで起こつた。

その殆どが「性」に関連していた。強姦とも和姦ともつかぬ事故である。そうした事故者は、予備役兵のチャキチ

ヤキの二十四、五歳の若者たちによって占められていて、さすがに後備役兵にはなかった。

もっとも、「第五動員ノ甲」には、後備役は非常に少なかった。私の旧知の同年兵は数名にすぎない。私たちは、七年の歳月と生活の陰翳を、三十男になった顔にそれぞれ刻んで再会を懐しがり、貧乏クジを引いた互いの不運を、昔の兵隊言葉に復かえってかこち合ったものだった。

葡萄酒主の赤松上等兵もその一人であるが、或る日、妻君が二人の子供を伴って面会に来た。彼は、妻君持参の稲荷ずしを私に裾分けしてくれながら、子供たちをちょっとの間遊ばせてやっでは貰えまいかと云った。やや照れた顔つきであった。

「衛戍病院裏へ、女房を連れこもうと思うんや」

病院裏で通るその山林は、昔から密会場所として知られていた。赤松の子供は五つと六つの年子の男の児であった。私は、ひと刻、練兵場でバツタ探りなどして遊んでいた。暑い日だった。山林の蟬時雨を、夫婦は永く耳底に残すことになるだろうと思った。そして、私も、妻が来たらきっとそこへ行くことになるだろうと……。

その翌日である。これも同年兵の鶴西一等兵から、私は秘そかな相談を持ちかけられた。

「ちよつと家に帰って来たいんやけエド……」

私は、赤松の例をひいて、電報で妻君を呼び寄せるようすすめた。いや、そんなことでなく、片付けてきたい大切な用事があるのだという。

彼は宿舎で自転車を借りる手筈を、すでにととのえていた。鶴西の村は、岡山市の西南十里余である。夕刻出発すれば、明朝の点呼前までには用事をたして帰れる。今夜の点呼だけ胡魔化しておいて貰えまいか、と熱心に云うのである。

職業は石工だが、現役時代から温和な、悪くいえばモッサリした男だった。何処かでビンタが鳴るので気がつくと共に、彼がいて殴られているといった目立たぬ人物であった。そうしたところは、三十男になる今も変らなかつた。私は、許諾してその夜の点呼報告を偽った。

点呼は、分宿している班員を訪ねて「員数居るかい」と訊き、本部へ報告すればよいのだった。

その夜も名物の「備前の夕風」がきびしかった。無風、



高温多湿の寝苦しい夜をいうのだが、深更、私は日直将校の来訪を受けた。玄関には憲兵伍長が待ちうけていた。理由は聞かされず、その場から私は憲兵隊に引致されたのである。

途上、あのことだと私は思いあつたが、しかし、深夜の捕物とは、いかにも大袈裟すぎる気がした。

妻の手紙で知つたのであるが、私の応召後、芝の愛宕警察署の特高二名が、私の下宿を訪ねて、主として本棚や机の抽出等を引つ掻き廻わしていったという。若干の手紙類と書籍を押収したらしい。

私は身におぼえが皆無とは云わぬが、それはもう久しい以前のことであつて、現在の私は「赤」とは無縁である。しかし軍隊が「赤」に就いて滑稽なくらい神経質なこととは承知している。おそらくあのことであろう。

ところが、違つた。私は愕然としないわけにゆかなかつた。鶴西が彼の妻君を射殺したというのである。拳銃と実

包は、昨日の兵器庫の使役の際、盗み出したものらしい。それでは、彼の「片附けてきたい大切な用事」とは、妻君を殺すことだったのか！

彼は日頃、あまり私たちの談笑に加わらず、したがって、その私生活を私は知る由もないが、憲兵達の不謹慎な談笑裡に、事件の核心を私はうかがい知ることができた。

鶴西の妻君は「ちよいと渋皮がむけ」ていて、「淫乱の縮れっ毛はほんとうだぜ。あの女も縮れっ毛だった」それで、「亭主は尻に敷かれ通し」だったという。

しかし、私はもともと鶴西要次郎については同年兵という以上の友情を感じたことはなかったし、妻君にいたっては名前も知らないものである。にもかかわらず、当分晴れそりにもない憂鬱が、暗く心に翳り落ちるのをその時意識した。

憲兵隊から聯隊の営倉に移されたのはその翌日である。虚偽の点呼報告による「重営倉五日」の処罰に服せしめられるためであつた。

聯隊では第一次野戦要員部隊の出征が目睫に迫つていて、夥しい面会者の群れが陸統と営門通りにつながつてい

た。面会者は面会所から溢れ、馬場の桜並木附近に座りこんでいた。さらにそこからもハミ出された人々が営倉周辺に屯していた。

兵隊唄にある「杉の丸太が二十と五本……」の営倉の丸太格子によじ登ると、高窓越しにそれらの人々が見えた。

妻君のさしかけるパラソルの陰で、膝に幼児を乗せて、巻ずしや卵焼をつまんでいる召集兵。両側から父母に挟まれてはた餅を喰べている上気した顔つきの若い現役兵。子供と戯れている軍服の夫を凝っとみつめている妻。樹かげに袴と身体を寄せ合って動かぬ組は、婚約者たちであろうか。

真夏のかつと烈しい陽が、それぞれの色彩をきわ立てて見せているのだった。

面会時限の夕食喇叭が鳴り終っても、なおいつかな面会者たちは腰を上げようとしない。衛兵が声を喰らすのが効き目はなかった。やがてたち單める暮色が、パラソルも着物もただ一色の暗灰色に溶かしこんでゆく。

私は、やっと格子から降りる。固形塩をかじり飯盒めしを喰べる。重営倉者には副食品は差入れられないのであつ

た。空飯盒を取りに来た衛舎掛り上等兵がぼやいた。

「少し暗うなると、便所や垣根のかげでスコンスコンはじめ出す。紙をやたらに散らかしくさって処置なしや。はっはっはっ……」

私も笑ったが、笑いのあとに、ずしりとした悲哀感が残った。面会風景の賑やかさは、切なさの裏返しにほかならないのである。私は思った。今更、妻と自分を切ない風景の中に曝したとてどうなろう、と。

よし、妻を呼ぶまい。私は、そう決意した。そして、翌朝、自分の決意の不動を再確認して、はじめて吻^{キス}としたのである。

しかし、入倉中の私は、丸太格子に登らぬ日はなかった。営倉内の無為と、無為のために陥る思索から逃避するには、切ない風景を噛み泳いで眺めているのが最もいい方法であった。

夜。営倉は、あたかも沙がひいたように沈寂となる。私は、寝そびれて考えごとにとつ捉まるのを怖れ、毎夜、消燈喇叭とともに、否応なく眼をつむり、一から十までの数を繰り返し数えるのを日課としていた。

営倉の最後の夜は、しかし、私は寝入りばなを眠りの淵から引きずり上げられることになった。泥酔兵が一名、衛兵たちに小突きまわされながら収容されてきたのである。酔漢は正体なかった。しかも、なお暴れようとし、獣のように吠え、邪慳に突き立てられて私の房の前を通り過ぎた。

私は、起き上って格子にすり寄った。酔漢の顔は、ちらちらと眼に映じたただけであつたが、あいつではないかと思われたのである。

奥の房のあたりで、罵声と殴打の音が始まった。

「山田じゃないのか。おーい、山田正助ではないかア？」

私は大声で呼んでみた。

「誰やア。どいつやア？」

その声は、やっぱり、あいつである。

「おれだ。おれだよ、山正！」

「うわアッ！ ム、ムネさんやなッ」

どけ、どけッ邪魔さらすな、と山田正助の怒号はにわかには生彩を放ってきた。格子へすりつけている私の視界の隅に、衛兵が烈しく羽目板へ突き飛ばされるのが映じ、さら

にもう一名が隣房の前へハネ飛ばされてきて尻餅をつくのが見えた。どうやら山田正助のバカ力は昔のままとみえる。と、すれば、これは放つては置けない。

「止めろ、山田。暴れるな。止めるんだ！」

が、騒擾は止まない。私は声を荒げた。「やい、山正！ 貴様、このおれのいうことが肯けないのか。それならもういい！」

これは、七年前の現役時代に、こうした場合で私が用いた彼に対する「護符」のセリフなのであつた。

「肯く、肯く。もう止めた。止めるけエ、ムネさん、そう慍おこんなや」

昔とそっくりの山田正助のこの返答は、私をドキリとさせた。私は、古い「護符」が、昔のままの効力をいま発現したことに、愕きと懐しさを覚えたいではないらなかつた。「そやけど、ムネさんはなんでブチこまれてるんや。それとそうとな、ムネさん。鶴西の阿呆ンだらが、しようもないことをやりくさってなあ……」

「知ってるよ。まあ、いいから、今夜はおとなしく寝ろ。おれも、もう寝る」

「ああ。寝る寝る。ムネさんがそう云うなら寝る。けど、ムネさんも同じ召集やったとは、こら、有難いな。こら、ええわ」

衛兵の「さっさと入れ！」という不機嫌な声が聞え、錠のおりる音が、静かになった営倉内に、びーんと大きくひびいた。

「済まなかった。が、まあ、勘弁してやってくれ。昔から酒ぐせが悪くて、よく事故をつけては営倉に入っていた男なんだよ」

戻ってゆく衛兵たちに詫びながら、ふと、私は気がついた。これでは、昔のままの再現ではないか。思えば七年前の現役時代にも、彼の詫び係りは専ら私が相勤めさせられていたのである。

この調子だと、山田正助は再び私も、私を介添えにして昔のお浚えをやらかすのではあるまいか。

奥の房から、半ば眠りに惹きこまれた呂律のあやしい呟きが、ふと、聞えてきた。

「……こら、有難いな。こら、ええわ。こら、ええわ。こら……」

私との再会の飲びを云っているのにちがいはなかった。その酔夢の言葉は私の鼻梁の奥に、つーんと応える。しかし、私は、ああ、やれやれ！ という慨嘆を禁じ得ないのである。

2

七年前の現役兵時代、私は、中隊中の鼻つまみ者の山田正助の、極めて数少ない「御最良」の一人であった。

由来、「御最良」たるものは、あえて損失を甘受する覚悟がなくては資格に欠けるが、私の場合は彼から押し売られてなった「御最良」で、決して自発的ではなかったのだ。

にもかかわらず、在営の二カ年、あたかもそれが当然といわんばかりに彼は、私にさんさん迷惑をかけ、さんさん手を焼かせ、さんさんに尻拭いをさせて、恬としていた。

私は、時に、立腹し、また、業を煮やし、幾たび「御最

「眞」辞退を決意したかしのない。が、どういふわけか、私は遂に心から彼を憎むことができなかった。そんな、どうしても憎みきれないようなところが、彼のどこかにあったのである。

思うに、人間関係にも禽獣における「天敵」の法則は存在するものようである。

彼との初対面は、昭和四年一月十日であった。さして重要でもない年月日をはっきり憶えているのは、その日が初年兵の入営日だったからである。

霰のたばしる営庭に集合して、特務曹長（後の准尉）の呼名点検を受けた後、医務室で身体検査が行われる。

「着衣は全部脱ぐ。フリチンになる」

当時の入営兵の服装は、青年学校服、着物、紋付羽織、背広等まちまちであったが、一人だけ、袖口のすり切れたラシャの厚司に、膝の抜けたズボン、地下足袋ばきという風態の入営兵がいた。

そのあまりにみすばらしい身なりは衆目を惹いたが、裸体になったとき、彼は、衆目を睥らさずにはおかなかった。

さながら「筋骨隆々」という言葉が、生きてそこに仁王

立ちになったようであった。胸の厚さ、幅。粘土でこね上げたような肩の肉瘤。太く逞しい腕。上体が異常に発達しているせいか、臀部がすばんで見えて、将棋の駒の「角」を逆さにした恰好に似ていた。

色黒の容貌は、魁偉と書いても、または怪異と書いても差支えなかったが、それでいてどこやら滑稽味を帯びていなくもなかった。

医務室から中隊の舎前に引率されて、内務班割りを達せられる。私と彼は同班になった。第三内務班に入ってゆくとき、はじめて彼が話しかけてきた。

「一緒やなあ」

彼の前歯は一本、半欠けであった。

班内の長机の上には被服類が山積してあった。作業衣袴一。三装の甲・乙の軍衣袴各一。襦袢袴下各二。軍帽、編上靴各一である。

「びったりとはゆかん。少々のところは身体で合わせる」被服の支給が終わるころ、昼食になった。

赤飯にお頭付の一装めしであった。これが二年後の満期の朝までに泣いても笑っても食べなければならぬ二千杯の

盛切めしの最初の一杯なのであった。

食事が終ると宣誓式が行われる。中隊長の軍人勅諭奉誦。一場の訓示。それから中隊長の面前に一人ずつ進んで宣誓書に署名するのである。

私の前列が山田正助であった。彼は毛筆を執り上げたが、なぜか、しばし、署名をためらった。特務曹長に促がされて、ようやくと署名して引き退った。次が私である。宣誓書に向ったとき、私は彼のためらいの理由を知った。

山田 ショースケ

それは、小学生のようなたどたどしい文字であった。式のあと、班内に戻って私たちは私物の衣服を家郷に返送するための梱包にとりかかった。

「済まんけエど……」と、山田正助が来て云った。「わしのこれ、その中へ一緒に入れておくれんか」

これというのは、例の厚司とズボンと地下足袋と下着であった。私のけげんな表情に出会うと、彼はその魁偉な顔に、意味の判然としない微笑を浮べて云った。

「わし、送り返すところがないんや」

その語調からは、悲哀も羞恥もまったく感じられなかつ

たが、私はいたく胸を衝かれた。

「うん。よっしゃ」

私の入営着は、羽二重の紋付と仙台平の袴である。その上に、厚司とズボンを重ねると、その懸隔の著しさがきわだち、私は荷造りの手をせき立てられずにはいられなかつた。

入営第一日の初年兵の心細さは、窓外に暮色がにじみ、ぽかっと裸電燈が班内の天井に灯るとき極まってくる。この時誰もが吾が家の夕べの食卓を遙けく偲ぶのである。

山田正助が、なにかもの云いたげに私を見ているのにその時私は気づいた。視線が合うと、彼はやってきて、低声で云った。

「腹、空ったなあ。晩めしまだやるか」

私は驚ろいた。彼も私と同じように心細い思いを味わっているものとはかり思っていたのである。こうした際に、食欲を^うたえる彼の胃袋と神経は、私にとって不可解であるばかりでなく、多少、無気味でもあった。

わが第二中隊の標語は、「真摯熱烈」というのであった。東の石廊下の壁面には、標語と並べて、直屬上官の官姓名が掲げ出されてある。

第十師団長 陸軍中将 本庄繁閣下

第三十三旅団長 陸軍少将 磯谷廉介閣下

第十聯隊長 陸軍歩兵大佐 小畑敏四郎殿

第一大隊長 陸軍歩兵少佐 水田一貫殿

第二中隊長 陸軍歩兵大尉 堀江正義殿

その他、中隊附將校、准士官、下士官等十数名の官姓名である。

初年兵が、まず、暗記せしめられるのはこれであった。

「あの官姓名を、片カナに書き直しておくれんか」

山田正助が、私のところに来て、至極、さりとそう云った。もはや、済まんけエど、という前置はなかった。うん、よっしゃ、と私は相手のさりに釣りこまれて引受けたのであったが、この調子だと次に来る「軍人勅諭」「不寝番守則」「歩哨一般守則」等々も翻訳させられるのではないかとひそかに心配した。

それは杞憂ではなかったのである。

たまには他の同年兵に依頼してくれてもよさそうに思うのであるが、彼はあたかも義理堅いお得意様の如く、爾来二カ年の間、なにからなまでに私ひとりアテにし、なにかにつけて、一から十まで私にモタレかかる方針を決して変更しようとしなかったのであった。

彼のそうした態度には、一旦、お前に決めた以上、もう仕方がないといったところがあつた。同時に、あるいは私にも、そう決められた以上は、もはや致し方ないといったふうなところがあつたかもしれない。

人事係の特務曹長から、山田正助の身上調査簿の閲覧を特に許可されたのは、私がそれを読んでいる将校室の窓への沈丁花の匂いが障^{さや}せるようであつたから、たしか、第一期の検閲直後であつたろう。

「世話がやけるじゃろうが、まあ今後も山田の面倒をみてやつてくれい。参考までにこれを見せてやるけエ」

特務曹長は、そんなことを云い、身上調査簿をひろげた。

——彼は私生児であつた。父親は不詳。母親は貧農の娘